

ロンドンで暮らして③

「小さな違い」について

日系銀行勤務

由紀子アンダーセン

海外の暮らして気づく日本との違いは数多い。その内容も、物理的な物や環境、気候風土、人々の習慣、物事に対する考え方など様々だ。私の場合日本で暮らしていたのが札幌という地方都市であるのに対し、ロンドンが一国の首都でありヨーロッパの大都市であることからの違いも大きい。

今回はそういった中でも初めは気づいて驚いたがそのうち慣れてしまった「小さな違い」について書いてみようと思う。

果物の皮も食べる

日本にいた時にぶどうを丸ごと食べる外国人を見ていたし、りんごであれば自分でも皮をむかずに食べる



珍しい果物が並ぶイランの果物店。ロンドンにはこういった世界各地の商店が並ぶ

ことはあったが、基本的にこちらの人はバナナやオレンジは例外として大抵の果物の皮を食べるようだ。ただ、「郷に入りては郷に従え」で今では私もりんごは丸かじり、ぶどうやプラムは皮ごと食べるようになった。しかし洋梨や桃の皮は舌触りが悪いので皮をむくことが多い。



見た目は日本のものとあまり変わらないイチゴだが、甘みが少なく、酸味が強いものが多い



ブルーベリー、ブラックベリー、ラズベリーなどのベリー類は日本に比べると身近で手に入りやすい

逆にこちらの人が普通食べないものに魚などの皮がある。魚を頭から骨ごと食べたり、えびの皮をパリッとさせて丸ごと食べると、いかにも残酷なことをしているような視線を周囲から浴びてしまつことさえある。

似て非なる野菜

スーパーに並ぶ野菜には、日本と「同じもの」とほとんど日本では「見かけないもの」がある。でも一番気になるのは日本の野菜と同じでありながら「少しだけ」違うものかもしれない。例えば日本と比べて巨大なきゅうりとなす。逆に小さくて白い部分が短いため白髪ねぎなどは作れないねぎ。千切りやロールキヤ



写真のニンジンの長さは約15センチでキュウリは倍の大きさ。手前のネギはサラダオニオン（あるいはスプリングオニオン）と呼ばれ、日本の長ネギの代わりになるもの。ダイコンは日本のものよりかなり小さい。



霧雨ばかりとたかをくくっていると、たまに大雨に降られることもある (©Shawn Morrison)

ベツ作りに適さないキャベツやしなしなどとしておろすのに苦労する大根本がある。かぼちゃは何とそのままの名前でK A B O C H Aとして売られているが、皮が異常に硬くて包丁が刺さらず、電子レンジかオーブンで丸ごと加熱してからでないと思えない。こういった違いから、私が普段食事を作る時の調理方法や料理のレパートリーも多少変化したように思う。

傘の寿命

ロンドンの気候は一年を通して温暖で季節感が薄く、また曇りや雨がが多い。雨の降り方も突然降ったかと思つとすぐ晴れたり、あるいは霧雨

のような雨が続くので、わざわざ傘をささずに歩く人が圧倒的に多い。また、傘の質が悪いのか風が強いためなのか、傘が非常に壊れやすい。半分壊れた傘をさして歩く人、壊れた傘が路上に捨てられているのもよく見る光景だ。私の場合も日本では傘は5年、10年と長持ちしたのに、こちらに来て4年目の今、傘は3本目となっている。

季節感や人目を気にしない服装

また、こういった気候の為、真冬にタンクトップやTシャツにサンダルの人もいれば真夏に冬用のセーターやコートを着込みブーツを履いている人もいる。確かにチューブ(地

下鉄)のホームや車内ではうだるような暑さになるが、外では7月や8月でも天気によってはセーターを着て汗をかかない日もあるので、日本のような明確な「衣替え」という概念はないのだろう。

街中ではいかにもシテイ(ロンドンの金融街)で働くような高級スーツ派、最近の流行を追うトレンド派、若者の前衛的なファッション派、くたびれた格好の普段着派、あるいはペンキや泥で汚れきった服を着た労働者系など、様々な服装を入り混じった季節感で毎日目にするので、朝会社に着ていく服を選ぶ時、逆に季節や他人の目を気にすることがなくなつたように思う。その日の天候や気温、自分の着心地や都合に合わせて良いのは気楽である。

いつでも携帯電話

日本と同様携帯電話の普及率は高い。ただ、日本では公共交通機関の車内では電源を切るように決められているのが普通と記憶しているが、こちらではそういった決まりがないようだ。通勤中の車内で携帯電話の会話が耳に入ってくることは少なくない。静かな車内に突然着信音楽が

なり、大声で話を始められるのはあまり気持ちの良いものではないが、はつきりした決まりがないので咎める事は難しい。



ホームの形を見ると、ロンドンの地下鉄が「チューブ」と呼ばれるのは、なぜか一目瞭然

時刻表のない地下鉄

ロンドンのチューブ(地下鉄)は世界で最も古い地下鉄のひとつだ。網の目のようにロンドン市内を走り中心部では5分も歩けばすぐ地下鉄の駅を見つけることができるので便利である。しかし古いせいもあり遅延・故障やトラブルが多いのもその特徴である。初めはどこにも時刻表がない事実には驚いたが、たとえ時刻

表があっても時間通りに来ることはない経験から学び、今では気にならない。とにかく来るまで待ち、乗れたら乗る、という心構えである。

ラッシュ時などは満員で乗り込めず1、2台見送ることも少なくない。

日本では「○分のバスに乗って○分の地下鉄に乗れば○時○分に○○に到着」などいつでも旅程の時間をあらかじめ計画することができたが、こちらに来てそれが必ずしも可能でないことがわかり、計画自体をしなくなった。悪く言えば諦めかもしれないが、少しのんびり暮らせるようになったと良い方向に考えている。

パブの注文方法

英国文化の代名詞ともいわれるパブ。街中に限らず住宅街にも必ず近くにパブがある。飲み物はカウンターに行つて注文し自分で運ぶ必要があるが、食べ物も多くの場合カウンターで注文した後ウェイターが運んでくれる。グループで飲みに行った場合はグループの代表が全員の注文を聞いてカウンターで支払い、テーブルまで注文した飲み物を運ぶことになる。そしてグラスが空いてくる



天気の良い日はパブの外に出されたテーブルで一杯。通りがかった知り合いが合流することもある (©lastrounds.co.uk)

と、別の誰かがまた皆の分を注文する。パブにグループで出かけると、このラウンドを何度か繰り返すのが普通である。状況によっては全くお金を払わずにビールを数杯飲むこともあるかもしれないが、そういう場合は次の機会に進んで最初に皆の注文をとりまとめるのが暗黙の了解のようである。

ヨーロッパの夕食時間は遅めで、パブでは必ずしも食事を出すとは限らないので、仕事帰りのパブでは空腹のままビールを飲むことになりやすい。つまみも日本なら枝豆など比較的健康的に良さそうな選択も可能であるがこちらではせいぜいクリスプ(ポテトチップス)くらいである。また、大勢で人気のパブに行くとき椅子やテーブルが足りなくてずっと立

ちっぱなしになることもある。

パブにもランチや仕事帰りに立ち寄るシテイタイプと、家の近所にあつて週末などに家族で出かけるファミリータイプがある。どちらにも大抵サッカーの試合が見られるスクリーンが設置されているのはサッカー好きなお国柄の為であろう。後者には他にもダーツ(投げ矢)やプール(玉突き)台、サッカーゲームなどがあつたり、外にテーブルとベンチに加え子供が遊べるようなスペースや遊具がある場合もある。天気の良い週末に友人と外でランチというのなら、例えばテムズ川沿いの眺めの良いパブや公園など自然がある場所のパブで早めに席を確保するのが良いだろう。

ベジタリアンですか

もともとが肉中心の食文化の反動なのか、自称ベジタリアン(菜食主義者)が多い。日本は古くから大豆食品や野菜を多く食べる食文化なので、特に高齢者などは気づいたらベジタリアンになっていたということもありそうだが、こちらでは単に野菜という生野菜のサラダにしかないのではなく、意識してベジタリアン用の食事をとらないと体に必要な蛋白質などが欠如し栄養的に満たされない。また、ビーガンと呼ばれる極端な菜食主義者もいて、こういった人達は肉や魚だけでなく乳製品や卵も食べない。レストランではメニューにベジタリアン用のマークを表示することもあり、ベジタリアン専用レストランもたまにある。私と夫は基本的に好き嫌いがないため日常的に野菜だけを選んで料理するということがないが、友人を自宅での食事に招いた時に「実はベジタリアンなので」といわれると料理に頭を悩ませることになる。とはいえ、我が家ではまだビーガンの人を招いたことはなく、できれば将来的にも招待せずにすることを密かに願っている。

ベジタリアンには海草や豆腐を使



男性だけでなく若い女性も刺青を入れている人が多く、特にお腹や腰周りの刺青を見せるようなファッションが流行している (©Arseny Vesnin DesignCollector.nu)



フルハム・ハマースミス地区商店街通りにある人気のベジタリアンレストラン

ながら食べ

食習慣でいうと、職場の机で仕事をしながら朝食や昼食、あるいはおやつを食べるだけでなく、駅のホームや車内、その辺の道を歩きながらも物を食べたり飲んだりしている人が多い。携帯電話での私的な会話を聞かされる時と同様、他人がすぐ目の前の公共の場で極めて私的な「食べる」という行為に突然従事するのを見ると戸惑うことがある。

また、ベジタリアンとは違うがこちらの人は魚嫌いが多く、魚そのものだけでなく魚のおいがするものや苦しとする人もいる。日本食は鰹の出し汁を使っていることが多いので、それだけで「魚臭い」と敬遠されてしまうこともあるらしい。

タトゥー(刺青)人気

さて、日本では刺青があると公衆浴場や温泉で入浴拒否されるはずだが、その心配がないせいか、英国では老若男女を問わず刺青をしている人が多いと思う。刺青が入っている体の場所やその文字・絵柄によってはファッションの延長と理解できるが、高齢の方の皮膚にあつて見るに忍びないもの、大きく派手で「ヤクザ」を連想させる刺青にはつい眼を伏せてしまう。

少ない休日

英国は欧州内一番のワーカホリック(仕事中毒)といわれ、年間の有給休暇数も最も少ない。また、国民の祝日にあたる英国のバンクホリデイはクリスマスや元旦を含めて年間8日間だけだ。祝日の多い日本と比べると楽しみが少ないが、夏季に2週間程度の長期休暇を取りホリデイに出かける習慣は他のヨーロッパの国と同様、一般的である。日本ではまだまだ長期休暇を取りづらいと聞いているので、いつか日本で暮らすことになればこの違いは逆に懐かしく感じるようになるだろう。

札幌市内10区にわたり
約62万世帯をポスティング可能

- ◆チラシ、サンプル類のポスティング義務
- ◆各種内職・代行作業

【札幌市内10区に組織している
主婦の集団がお手伝い致します。】



北海道ポスティング協会会員

株式会社 **リッド**

本社 〒063-0802 札幌市西区二十四軒2条1丁目1-65
TEL011-612-3100 FAX011-612-3105
URL <http://www.d-shinkou.co.jp/posting/rid/>